

「自己理解（総合科目）」実践報告

—「教育とジェンダー」に関わる学生の意識について—

友 野 清 文

はじめに 授業の形態と課題

本稿は私が、杉谷裕美子氏（教育人間科学部）と新田司氏（非常勤講師）との3人で担当する人間理解関連科目・教養コア「自己理解（総合科目）」の2020年度前期の授業に関する報告である。学生のレポートから「教育とジェンダー」に関わる意識を見るが、それに先立って授業の形態とそれに関係する点に触れておきたい。

1 オンライン授業について

本科目の授業はすべてオンラインによって行われた。全15回のうち、第1回のオリエンテーションから第13回までの授業は、動画配信により行った。第14回・第15回は、Webexによるリアルタイム授業で、学生からの質問に3人が答えるという形を取った。

受講生が例年1クラス120名程度で、従来から講義形式で行ってきたため、CoursePowerによる動画配信に移行すること自体は、それほど困難ではなかった。私はこれまでと同様に、レジュメと資料を掲示し、それに授業動画と外部動画（これまでも授業の中で視聴していた動画）を追加した。

評価は、毎回の出欠と「小テスト」の内容によって行っており、今回はCoursePowerの「レポート」に直接入力する形で踏襲した。

全体として大きな混乱はなく終わったと思われるが、オンラインならではの課題や問題も発生した。私が見る限り大きく3点ある。

第一は、資料や動画の閲覧についてである。レジュメ・資料や動画は、授業

開始時（毎週木曜日3限の始まる13時20分）から3日後の日曜日15時まで、閲覧できるようにした。小テストも日曜日15時を提出期限としたが、翌週木曜日の授業開始時までの遅れての提出も認めた。授業期間に毎週、学生の閲覧状況を確認することができず、学期末の評価の際に確認したところ、毎回一定数（ほぼ1割程度）の学生が、資料や動画を見ることなく、小テストを提出していたことが判明した。小テストのテーマ（内容）は、CoursePowerの「レポート」に示しており、それだけを見て記入できるようになっていたことが問題であることは確かなのだが、正直なところ想定外であった。また第14回・第15回でのオンライン授業でも、授業時間の終わり頃から終了後にかけてアクセスしていた学生も見られた。

学生にとっては、慣れないオンライン授業の中で、多くの課題が課される状況にあるため、資料や動画をきちんと見る余裕がなかったという事情があると思われる。

第二は、こちらが学生の理解度を十分に把握できず、必要な補足などができなかったことである。これまでも、授業の中で特に質疑応答を行ってはいなかったが、小テストに書かれている質問などから、必要に応じて次の回で説明を補足していた。動画の場合、そのような細かい対応ができない。最後の2回での質疑応答で若干は補えたとは考えるが、やはり学生の顔を直接見ながら話すようにはいかなかった^{*1}。

そして第三は技術的なことであるが、動画揭示や、揭示期間などの設定にあたって、いくつか間違いがあったことである。これは準備と慣れの問題であるが、実際問題としては一番大きなことであろう。

以上のような課題・問題はあったが、同時にオンライン授業のメリットを感じた面もあった。特に私が感じたのは、授業に関する資料の分量を増やすことが可能であった点である。教室での授業であれば、時間内は基本的に講義を行っており、その中でまとまった資料を読むことは難しかった（もちろんそれができなかったわけではないが、授業内で資料を読むための時間を取るのは無駄であると感じられた。また事前に読むように指示することも、現実的ではない

と判断していた)。それに対してオンラインであれば、講義(動画)の部分を少し短縮して、まとまった文章を資料として提示するができた。もちろんこれも、どのくらいの学生がきちんと読んでいるのかは分からないが、熱心な学生には、授業内容以外の追加情報に接することができる機会となったのではないかと考えている。

コロナ禍の中の教育についての議論の中で、これを「好機」としてICT活用を推進すべきであるとするものが目立つ。私はこのような主張にはかなり懐疑的であるが、それでも利用できる部分が全くないとは考えない。いずれにしても大学に限らず、学校教育全体の目的や意義について考えるきっかけであることは確実であろう。

2 授業の概要とレポートのテーマ

1) 授業の概要と受講生

先に触れたように「自己理解(総合科目)」は、3人の教員が3クラスを順番に担当して講義を行う形で行われている。教育学を専攻する私たちの担当科目では「大学生としての学びの意味—現在の社会と教育から自分を考える—」を全体のテーマとし、その中で私のパートは「現代社会の中の自分—ジェンダーの視点から自分を振り返る—」として「ジェンダーの視点からの自己理解」がテーマである。授業の内容や学生のレポートについてはこれまでも報告を行ってきた^{*2}。本稿のテーマはそれらと共通するが、前回の報告から8年経過しており、学生の意識に変化が見られることも予想される。

今回対象とするのは、2020年度前期に青山キャンパスで行った「自己理解(総合科目)」(木曜日3限)で、私の授業で提出されたレポート(小テスト)である。その内容から、学生の「教育とジェンダー」に関する意識を検討する。

受講生は3クラス合わせて375人で、学部・学科別人数は以下の通りである。

「自己理解（総合科目）」実践報告

ー「教育とジェンダー」に関わる学生の意識についてー

文学部	100 人
英米文学科	36 人
フランス文学科	29 人
日本文学科	23 人
史学科	5 人
比較芸術学科	7 人
教育人間科学部	39 人
教育学科	25 人
心理学科	14 人
経済学部	81 人
経済学科	51 人
現代経済デザイン学科	30 人
法学部	10 人
法学科	10 人

経営学部	27 人
経営学科	13 人
マーケティング学科	13 人
留学生	1 人
国際政治経済学部	67 人
国際コミュニケーション学	8 人
国際政治学科	25 人
国際経済学科	34 人
総合文化政策学部	50 人
総合文化政策学科	50 人
地球社会共生学部	1 人
地球社会共生学科	1 人

学年別では 1 年生が 266 名、2 年生が 89 人、3 年生が 16 人、4 年生が 4 人である。

2) 授業の内容とレポートのテーマ

私が担当する各回のタイトルとキーワードは以下の通りである。

第 1 回 「女」・「男」であることとは？（ジェンダーとは何か？）

sex と gender と sexuality ／多様な性と LGBT ／「性差」と「個人差」

第 2 回 「男は外・女は内？」（家族の中のジェンダー）

近代家族／性別役割分業／母性と父性／WLB

第 3 回 「男が先・女は後？」（学校の中のジェンダー）

良妻賢母主義／女子特性論／隠れたカリキュラム／男女共学と別学

第 4 回 「人」とは「男」か？（学問とジェンダー）

近代社会の「人」／フェミニズムと「女性学」／ジェンダーバイア

ス／男性学

「教育とジェンダー」については、主に第3回で扱う。その概要は以下のようなものである。

① 学校教育制度の変遷

戦前の学校教育は「男女別学」が原則であった。それは単に男女を分けることなく、女子の教育目的は「良妻賢母の育成」であり、女子の高等教育を認めないという、制度的な性差別であった。戦後教育改革で「男女共学」の原則が示されるが、性別役割分業に基づく「女子特性論」が主張され、「高校家庭科女子のみ必修」が制度化された。国連の女性差別撤廃条約の批准(1985年)を契機として、実質的なジェンダー平等が進みつつあるが、課題も多い。

② 隠れたカリキュラム

「隠れたカリキュラム」とは教師や学校が意図していないが、その言動や環境によって、生徒が無意識的に身につける価値観や態度である。例えば、学校で担任の先生は女性であっても、管理職が男性であることが多ければ、「指導・管理をするのは男性」という意識が生じる。

③ 男女共学と別学

①で見たように、歴史的には別学は「男女差別」の制度化であり、共学体制が男女平等実現の1つの手段であったことは間違いない。しかし共学の中でも、家事や育児に関わる事柄は女性が担当するのが当然であるとする「女子特性論」が主張され、男女の「固定的性別役割分業意識」「ジェンダースtereotype」は維持・強化された。その中でむしろ別学(特に女子教育)の方が、学力面からも、非認知的力(主体性・自尊感情等)の面からも効果があるのではないかという議論が行われている。

以上が第3回の授業概要であり、この回のレポートのテーマは「①隠れたカリキュラムについて具体例を挙げて説明しなさい。②追加資料^{*3}を読み、男女共学と別学についての考えをまとめなさい。」である。また第4回では「私のパートを通してジェンダーについて考えたことをまとめなさい」というテーマを与えている。

3 レポートからみる「教育とジェンダー」に関わる意識

以下では、第3回授業の「男女共学と別学」に関わるレポートと、第4回授業のレポートから学生の意識を見ていく（基本的に原文の通りであるが、明らかな誤字脱字は修正した）。

1) 「男女共学と別学」について

- ・男女共学と別学のどちらに賛成するか、ということはわたしには分からない。共学は差別撤廃に向けた制度の象徴であるといえるし、別学も女性が伸び伸びと好きなことを誇らしくやれるきっかけを作ってくれるものであるともいえる。資料で述べられていた通り、男女が同じことをすることが必ずしも平等であるとはいえないし、一見差別的にも見える男女での別の行動をすることが、実は平等に結びついたりする。本当に難しい問題で、現在両方の種類の学校があることはいいことだと思う。私はこの授業を受ただけだから背景知識も少なく、よくわからない点もたくさんあるが、男女差別はもっと社会が積極的に考えていき、人間の根底にある考え方から変えていかなければならないと思う。私は共学の公立高校に通っていたが、確かに管理職の人のほとんどは男性で、教員として行事を引っ張ってくれた人もほとんどが男性の職員、面白くて人気のある男子が授業中によく指名されるということも経験したし、理系の特に工学系を選択する人は圧倒的に男子のほうが多かった。私はこのことを何も気にせず、平等ではないとも思わずに生活していたが、私みたいにこのような実態が当たり前として受け止められていることは、この授業を受けてみてかなり衝撃だった。そう思うと女子校はかなり差別的ではなく、女子生徒にとっていいことだと思う。ただ、共学は男子との関係や差別が実際にまだに存在することを学ぶ上で必要不可欠であるとも思う。まずは教員側から積極的に差別をなくすべく努力してほしいと思う。そして世の中でもっと女性が輝いてほしい。

(1年 英米文学科)*4

- ・私自身女子高に進学するのが嫌で高校、大学と共学を選びました。ですが別学のほうが性別の特性を生かせたり性別の差を気にしないかもしれません。理系には男子が多いといわれていましたし、実際自分の高校も二年生から文理選択でクラス分けされた際女子が理系には少なかったです。別学にしたら女子は男子よりも理系が得意ではないという意識はなくなり伸びのびと学習できる気もしました。共学の良さは、性別に関係なく仲良くなりお互いの特性を生かした行動ができることで

す。また教師にも女性の管理職の割合を増やし、女性が生き生きと働ける環境があり、女性が管理職に就くことが当たり前である雰囲気を作り男子生徒も女子生徒もそのことを認識できる環境を作るべきだと思います。(1年 日本文学科)

- ・私は男女共学は男女平等の実現において十分条件ではないという考えに賛同するが、一方で男女別学は女子の自己能力感や自損感情を失うことを防ぎ、理数系の科目に積極的に取り組めるなどのメリットがあるからといって、二項対立的に考え、別学を評価し推奨していくべきではないと考える。確かに、共学という形式的な男女平等によって女子がジェンダーバイアスを感じていることは事実だが、そういった現状を男女共に知り、問題と向き合うことが「避難所」のような別学を置くよりも大事だと思われる。別学にすると、より高い学業成績・職業的な達成が可能になる。しかし実際に社会に出ると男女が一緒に働く環境になるため、学校では感じることのなかったジェンダーバイアスを遅かれ早かれ感じてしまうだろう。そのため男女別学もまた男女平等の実現にはならないと言えよう。男女共学で隠れたカリキュラムや、教師の無意識による男女の異なる扱いに気づき、声を上げ問題視し、多くの人に認識してもらうことこそが真の男女平等の実現に近づくと考え。また現在、多様な性が存在し、性的マイノリティーで悩む人がいるという視点から考えても、男女別学は望ましいとは思われない。(1年 総合文化政策学科)

- ・男女共学が教育の男女平等に必ずしも結び付くわけではない。共学なら男女は平等な教育を受けていると誰もが思い込むことによって、学校の隠れたカリキュラムが無視されてしまうのではないか。学校の隠れたカリキュラムについて、教師はもちろん、児童、生徒も知ることが本当の男女平等な教育を共学で実現させるためには不可欠だと考える。私は高校生活3年間を女子高で過ごした。小中学生の頃は特に意識していなかったが、行事でクラスを引っ張って行ったり、授業で指名されたり、学校をリードしていく生徒会の人たちも、そのほとんどが男子だった。大事な時に頼るのは男子で、そのことに何も疑問を感じていなかった。女子高に入学し、クラスを率いるのも、学校を率いるのもすべてが女子になってはじめて、自分は今まで男子に支えられていたことに気づかされ、驚いた。(後略)

(1年 総合文化政策学科)

- ・男女共学、別学について、私は両方存在することに賛成です。私はずっと男女共学の教育機関で教育を受けてきました。中高一貫校に通っていましたが、男女別名簿、男女別の並び方、ロッカー・靴箱の順序、男女での色分け、体育男女別授業など「隠れたカリキュラム」と言われるものが多くありました。しかし、一度も男尊女卑だ

「自己理解（総合科目）」実践報告

—「教育とジェンダー」に関わる学生の意識について—

とは感じたことがなく、むしろ男女別で人数を数える時などは楽なときもありました。確かに、男女共学だと性に関する教育などがしにくい環境などがあるかもしれませんが、一度も嫌な気持ちになったことがありません。むしろ体育などは男女を分けてもらうことでお互いが全力でできていたのではないかと考えます。別学に関しては、実体験がないためわからないこともありますが、周りの別学を受けていた人たちは、確かに男性がいれば、女性がいればもっと楽しかったなと感じたこともあるが、その中で出会った親友たちは一生の仲間と言えるような存在ができたと感じていた。追加資料にあったように、別学であれば、「避けられたカリキュラム」の実践がしやすくなることは確かにあるでしょう。今、LGBTQの立場などが注目されるにあたって、別学の場合の線引きなどはとても難しく感じ、今後別学が減っていく原因の1つでもあるのかなと考えました。（1年 英米文学科）

・男女共学は、社会に出る前の学生の段階で異性と交流ができることで自然に社会性が身につく、多様な価値観に触れることができるので、別学よりもメリットが大きいと考えていた。しかし、共学はむしろジェンダーに関するステレオタイプを植え付けてしまうのではないだろうか。現在、ひと昔前からは改善されてはいるものの、社会には目に見えるものから隠れているものまで多くの男女差別や性差によるステレオタイプが存在している。男女共学では社会に出た時の自然な空間の中で学ぶことができるので、将来役に立つといえる反面、社会の縮図が学校に反映されているのであれば、それは前述した差別やステレオタイプも反映しているといえる。ステレオタイプは一度身につけてしまうと、その考えを改めることは難しい。ジェンダーによる差別や性別役割分業をなくすには、男らしさ・女らしさなどのステレオタイプを世の中からなくしていくことが大切であると考えている。（後略）

（1年生 国際政治学科）

ここでは「共学と別学」の問題それ自体を考えるというよりも、この切り口から、自分の学校・学習体験を客観視することがねらいである。ここで紹介したレポートは、各々の体験を振り返り、自分が受けてきた教育について改めて考えるものになっている。当たり前だと思ってきたこと、気づいてさえいなかったことを自覚することが、「自己理解」に結びつくと言える。

2) 「教育とジェンダー」について

ここではより一般的に、ジェンダーに関わる教育の課題についてのレポートに触れたい。

- ・わたしはこの授業を受けるまでは、ジェンダーや性別による差別という言葉聞いたときに、不利を被っているのは女性側だと無意識にとらえていました。しかし、この授業を受けてからは決してそれは女性に限った問題ではなく、男性側にも生きづらさがあり、双方向の問題であるということに気づかされました。これはジェンダーに関する教育の場では女性の立場の低さや社会的地位の向上などにばかり視点を置いている傾向があり、男性の立場にたったことが少し見落とされがちだからだと思います。今回、男性が女性と同じように育児にかかわる意思があったとしても物理的に制限されてしまう状況があったり（おむつ台が女性トイレにしかついていないなど）、男らしさという概念が男性を抑圧してしまっている現状があるということに目を向けることができたので、自分の中のジェンダー問題に対する見方の切り口を広げることができました。男女平等を考えると、今までは男性が上の立場という前提条件のもとに基準を男性としてそこにいかに女性の立場が追いつくかという風に考えていたけれど、これからは双方向からの見方で本当の意味での男女平等をもう一度考察しなおしていきたいと思いました。

(2年 現代経済デザイン学科)

- ・授業を受けるまで私はジェンダーの問題と聞くとLGBTの方々への差別や女性の社会進出を思い浮かべた。今までの学校生活で女子だから差別を受けた、男子と違う扱いを受けたと感じたことは無かったので教育の中にもジェンダー問題があると知り非常に驚いた。また、今まで気に留めていなかったということは私自身が問題に思っていなかった、社会で大きく問題として挙げられてこなかったということだ。そのことをとても怖いことだと思った。よく考えたら、目指す志望校のレベル、文理選択、成績競争の話など実際に自分自身や自分の周りで共感できるものが多かった。女性であるというだけで志望校、さらには進学すること自体を諦めてしまうようなことは絶対あってはならないことである。社会で活躍する人が高学歴な人だけではない。しかし、やはり政治家や管理職、教員はある程度の学力を持つ人が多い。すると、今のままではそういった職に就く女性が少なくなってしまうロールモデルとなる女性が増えていかない。そして、ロールモデルがいないと進路選択も今ののような状態のままだろう。悪循環である。男子も女子も同じような立場で進路選

「自己理解（総合科目）」実践報告

—「教育とジェンダー」に関わる学生の意識について—

沢をできる社会を作ることと女性の社会進出を促すことに繋がるだろう。

(1年 フランス文学科)

- ・私は中学校のときに、歴史の先生がある授業で同じクラスのある男子生徒を褒めたときに「今中学校の段階でまだ成績の差が見えないが、男性は高校生になると理科はより上手になるよ。女性はいくら頑張っても高校理科の問題について男性よりうまく解かないはず…」こう言った。その先生も女性で、当時クラス成績が一番いい学生も女の子だった。その後彼女は高校に進学してもずっと学校の理科の首席だった。私も女性なので小さい頃から自分は男性より劣るところがないと思っている。だからなぜ女性の先生がそんな話をしていたのか当時の私はとても理解不能だった。先生の授業を受けて私はその先生が多分自分自身に対してジェンダーバイアスを持っている気がした。社会や男性だけではなく、女性が自分自身に対して持つバイアスも無視してはいけないと思う。私自分自身もその先生のような知らず知らずのうちに自分に対してジェンダーバイアスのような観点を持っているかもしれない。だから、このようなジェンダーバイアスに関して教育は今後の社会進歩のためにも欠かせない教育だと考える。今後ジェンダー問題についてより深く勉強していきたいと思う。

(1年 フランス文学科)

- ・高校までの授業で学んだことは、多様なジェンダーのあり方。要するに、LGBTを抱えている人々が現代社会で活躍しやすいように私たちにはどのような接し方が適切であるのかを勉強しましたが、この講義では、自分が今までの日常生活の中でどのようにジェンダーと向き合ってきたのかについて振り返るように勉強することができましたし、より細かくジェンダーと教育や現代社会におけるジェンダーに対する認識を深く学ぶことができました。(中略) これを通して私が学んだことは、時間が経つにつれて女性に対する価値観が男性と平等の扱いをするべきであるという価値観に変化していきさらには、LGBTといったような新たな性が生まれてきたことで、そういったことを抱える人々の保護の必要性も生まれてきました。こうした時代の流れを学んだことで、これからはLGBTや女性、男らしさなどと言った価値観に関係なく接していくことが、そうした人たちに対して安心感を与えることになるかなと思いますので、私の自分も含め社会全体では、多様な性のあり方を実現できるようにこれからも性についてしっかり勉強していきたいと思いました。

(2年 経済学科)

- ・授業を通して「男女平等」とは何なのか、難しく感じる時が何度かあった。例えば、自分の高校の入試では他の都立高校と異なり、学校の定員に男女で区別をつけな

った。そのため男女にかかわらず、入試で高得点を取った者が上から順に合格を勝ち取るシステムであった。最終的には、出願時点で女子の方が多かったこともあり、男女比が3:7という形になった。他方、他の都立高校では男女で定員を分けているため、男女間で倍率や合格最低点が異なるものの、最終的な入学者は定員通りの男女比1:1となっていた。前者は入試段階で「男女平等」を実現し、後者は入学段階で「男女平等」を実現している。前者の方が実力で合否を決めているため平等と言えるだろうが、後者は男女の数が平等のため前者よりも異性の理解もしやすく、教育的にもメリットがあるように思える。このように、一言で「男女平等」と言っても、その実現方法には様々な形があるため非常に難しいテーマであると感じた。何が一番有用であるかを慎重に考えながら、行動に移していきたい。

(1年 国際政治学科)

近年、性的少数者の存在とその権利について様々な社会的議論が行われているのを受けて、学生の視野も広がっていることが分かる。ただ逆に「ジェンダー問題」というと「性的少数者の問題」であって、自分とは無関係だという意識が見られるようにも思われる。同時に「女性問題」であるという見方も根強くある。授業では、ジェンダーの課題はすべての女性と男性双方のものである(すなわち自分自身の課題である)ことを強調しており、レポートでもそれが受け止められていることが分かる。また最後のレポートにあるように「平等な関係」とは何かについて考えようとすることも重要である。異なる他者とのどのような関係を築くのか、どのような制度や仕組みが必要なのかという課題は、自己の生き方を考える上でのテーマになるであろう。この授業が、ジェンダーの問題を、各々の学生が自分自身の事柄として考えていくきっかけとなるよう、さらに改善をしていきたい。

おわりに

冒頭で触れたように、本年度の前期授業はすべてオンラインとなり、大学への入構についても、禁止されたり、大幅な制限がかけられたりした。大学生の生活の中で、授業は中心的場面の1つではあるが、あくまでも1つにすぎない。

友人とともに生活し語り合うこと、サークル活動に取り組むこと、アルバイトを経験すること、これらも大学生活の意義であるが、その経験の大半が失われた状況になったのは、本当に残念なことである。

いずれまた教室での授業が行われるようになるであろうが、高校以下も含めて、学校教育の意義と役割について、今回の経験を基にした議論と実践を行うことが重要であると考えている。その際のポイントの1つは「個別性と協働性」であろう。今後学習の「個別最適化」が進むことが予測されるが、その中で「協働的学び」や「協働的活動」をどのように進めるかが、大きなテーマになる。この課題についても取り組んでいきたいと考える。

^{*1} これと関係して、毎回の小テストを翌週までに確認できなかったために、学生から見ればきちんと提出できているのか（出席になっているのか）が分からず、不安を抱かせてしまうことになった。通常の授業では、教室で回収したものを学期末になってまとめて点検していたのであるが、オンライン授業では、出欠の確認も学生とのコミュニケーションの上で重要であるため、少なくとも提出されたかどうかの確認は、小テスト提出期限に併せて毎回行うこととした。

^{*2} 「ジェンダーの視点から自分を振り返る—『自己理解（総合科目）』報告」

『青山スタンダード論集』 第3号 2008年

「学生のジェンダー意識と自己理解：『自己理解（総合科目）』ミニレポートから」

『青山スタンダード論集』 第7号 2012年

^{*3} 拙著『ジェンダーから教育を考える』（丸善プラネット 2013年）第3章「男女『共学』と『別学』をめぐる諸問題」（pp.76-96）。ここでは、アメリカの議論を紹介し、男女共学が必ずしも男女に公正は教育機会を保障してはいないことに触れている。そして、equity（公正）とequality（平等）との関係についてを以下のようにまとめている。これは「共学＝平等・別学＝差別」という単純な二元論の問い直しを求めるものである。以下はその一部である。

「女子が男子と同一の教室に入り、同一の内容の教材を学ぶことはequalityの実現である。ひとたびそのような状況になれば、結果の違いは性の差ではなく、個人による差として理解されるようになる。しかし、このようなequalityの観点だけでは不十分なのである。必要なのはequityの観点であって、とりわけgender equityが重要である。これは「性の観点からの形式と結果の両方の形における公平な扱い」を意味している。社会の中にジェンダーによる不公正（inequity）が存在する以上、教育の場ではそれを修正するために積極的な活動が必要なのであり、fairであることは、必ずしもequalであること（形式的に同じ扱いをすること）ではないのである。共学校であっても女子のみの授業を行うことで、参加意識（feeling a part）や帰属感（belonging）

が得られ、主体的な振る舞いができるのであって、そのような配慮によってこそ equity が達成されるのである。(中略)

歴史的に見れば、共学の実現は女性解放の一つの柱であったのであり、男女が共に学ぶ意義を否定することはできない。逆に共学を主張する場合でも、今の共学校の現状に満足している訳ではない。男女共学の原則を踏まえた上で、教育方法の問題として、別学や別クラスの意義を捉えていく必要がある。」

*4 レポートの提出を、CoursePower での直接入力にしたことで、分量が多くなる傾向が見られた。授業時間内（15～20分程度）で手書きをすることと、数日間の中で入力することの違いであり、当然ではあるが、これもオンライン授業の1つの効果かもしれない。ただ学生にとっては、このような授業の課題が多く課され、まじめに取り組もうとするほど、負担が重くなることにつながるであろう。